

日本の里山問題:現状と対策,特に生物多様性保全に関する石川県の事例について

中村浩二(金沢大学・自然計測応用研究センター・生物多様性研究部門)

1. 里山(里地里山)とはなにか,なぜ重要か

「奥山」は,人里から遠い山,たとえば金沢では白山などをあらわし,昔から使われていたが,「里山」は,最近よく使われだした言葉である。里山は,よく管理された山林(原生林に対し,2次林とよばれる),水田,畑地,ため池,小川,用水路などが組み合わされた農村風景である。農家は近くの林地から燃料(薪・炭)や肥料(草を刈り緑肥とし,落ち葉を集めた),家畜飼料,屋根葺き材料をえるなど,里山は生活に密着していた。環境省では,「里地里山」として「都市域と原生的自然との中間に位置し,様々な人間の働きかけを通じて環境が形成されてきた地域であり,集落をとりまく二次林と,それらと混在する農地,ため池,草原等で構成される地域概念」と定義した。

従来の生態系の評価では,里山は農林業により管理された「2次的自然」として,「原生自然」にくらべて軽視されがちであったが,近年,重要性が見直されている。その理由は,(1)国土の約40%をしめるほど面積が広い。(2)水田,池,林など多様な生息地のパッチがモザイク状につながり,農林業により適度に攪乱されており,生物多様性が高く,多くの固有生物を含む。(3)里山の普通種(メダカや「秋の七草」等)が,今では絶滅危惧種に指定され,「身近な自然」の危機が認識されてきた。(4)長年,持続的に維持されてきた生態系管理システムであり,日本の風土,文化そのものである。

中山間地域は,一般的には「平野の周辺部から山間部に至る,まとまった耕地が少ない地域(農業白書)」とされており,食糧生産,水源涵養,災害防止に大切な働きをもち,すばらしい自然景観や伝統文化にふれあう場として,価値(多面的機能)が見直されている。この地域は国土の7割を占め,多くの森林を含み,わが国の生態系全体の土台であり,「里山」と大きく重複している。石川県では,中山間地域が県土の75%,里山が70%である。

2. 里山問題の深刻さ

近年,人間活動の縮小や生活スタイルの変化にともない里山が荒廃してきた。1960年代以降は,ガス・石油,化学肥料が普及し,里山は利用されなくなり経済的価値が減少した。その結果,二次林や二次草原が放置され,耕作放棄地が拡大し,里山生態系の質が劣化し,特有の動植物が消失しつつある。日本政府の『新・生物多様性国家戦略』(2002.3)では,生物多様性保全に占める里山の重要性が強調されている。絶滅危惧種の集中地域(メッシュ内に絶滅危惧種が5種以上生息する地域)の49%(動物),55%(植物)が里山にある。

石川県は比較的人口密度が低いので,自然が多く残っており,生物多様性が高い

が、今後の展望は非常にきびしい。特に、能登と加賀では農林業の不振、過疎化、高齢化の急速な進行により、農村社会が崩壊しつつあり、里山林は手入れ不足となり、モウソウチク林の拡大、ササの密生、獣害問題(ツキノワグマ、サル、イノシシ等)、ため池の管理不足と外来種(バス類、アメリカザリガニ等)の放飼による貴重種の絶滅等の深刻な問題が起きている。

3. 対応策はあるのか？

里山問題の根底には、ライフスタイルの変化、グローバル化による農林業の不振がある。そのため過疎化、高齢化の問題の解決は非常に困難である。最近、「里山保全活動」が、大都市圏を中心に盛んになりつつあるが、その活動が都市圏にとどまっているうちは、効果は限定的といわざるを得ない。里山問題を好転するには、中山間地を含む里山地域における農林業の再活性化が不可欠である。

4. 里山の生物多様性研究と地域連携による保全活動:金沢大学角間キャンパスの事例

金沢大学では郊外の角間丘陵への移転に際し、自然環境の保全・修復に配慮し、キャンパス内に「里山ゾーン」(74ha)を設置した。里山ゾーンは、豊かな自然に恵まれ、大学の教育(授業、実習等)・研究(金沢大学21世紀COE、国際生物多様性プロジェクト等)に利用するだけでなく、地域住民の学習活動、青少年の自然体験の場としても開放するために、金沢大学「角間の里山自然学校」を1999年に設立した。本講演では、里山ゾーンで展開されている生物多様性長期研究(多様性インベントリーと生物間相互作用の動態調査)の取組と成果とともに里山自然学校の活動内容を紹介する。

5. 里山の再生・活性化にむけて:「能登半島・里山里海自然学校」の設立

能登半島は、豊かな里山里海(自然)と長年培われてきた伝統文化に恵まれている。しかし、過疎・高齢化の急速な進行と林業などの不振によって、里山里海も荒廃しつつある。「角間の里山自然学校」では、従来から地域貢献の一環として、奥能登地区の里山里海の保全活動や環境に配慮型農林水産業の振興策の提言等を考えていたところ、三井物産環境基金の支援を受け、「能登半島・里山里海自然学校」を設立することになった。この自然学校は、金沢大学が委嘱している里山駐村研究員(地域の活性化に取り組んでいる42人)や自治体、農林水産業の関係者、地域の住民、ボランティアをリンクしたネットワークの総称であり、今後3年間の活動実績を踏まえ、将来的にNPO、特定非営利活動の法人化をはかり活動を継続する予定である。なお、活動拠点は珠洲市三崎町小泊地区の廃校になった旧・小泊小学校の施設が予定されており、珠洲市との打ち合わせが進行中である。